

通信小海

高慢は破滅に

牧師 水草修治

「ウジヤ王は神を認めることを教えたゼカリヤの存命中は、神を求めた。彼が主を求めていた間、神は彼を栄えさせた。・・・彼の名は遠くにまで鳴り響いた。・・・」

しかし、彼が強くなると、彼の心は高ぶり、ついに身に滅びを招いた。彼は彼の神、主に對して不信の罪を犯した。彼は香の壇の上で香を焚こうとして主の神殿にはいった。・・・主の神殿の中、香の壇のかたわらで、突然、彼の額に重い皮膚病が病が現れた。・・・主が彼を打たれたからである。」

歴代誌下二十六章

【今月のキーワード】

「人の心の高慢は破滅に先立ち、謙遜は榮譽に先立つ。」箴言十八十二

ウジヤは、古代ユダ王国の名君だった。十六歳で王となったウジヤは謙遜に助言者のことばに耳を傾けた。彼の前半生は、内政も外交も祝福され、彼の名はオリエント世界に広く鳴り響くまでになった。

しかし、やがてご意見番が亡くなると、ウジヤは己が業績をふりかえり自己満足にふけるうち、その心のなかに高慢が芽を出し、成長し、そして、天下に自分の権力のおよばないところはあつてはならぬと考えるまでになった。実は、王国の中にただ一つ王の権力が入り込むことを許されていない所があった。それは、主の神殿であった。主の神殿で香をたくのは祭司の務めと聖書に定められていたからである。

しかし、増長したウジヤは、祭司たちが止めるのも聞かず、主の神殿にずかずかと入り込み、香をわしづかみにした。と、その時、ウジヤ王は主に打たれた。彼のひたいに恐ろ

日本同盟基督教団 松原湖高原教会 牧師水草修治

牧師館 長野県南佐久郡小海町大字豊里一十六 一

〒三八四一一三 二六七九二四七七六

郵便振替 五三 六一六八三

黄色い十字架 パロの五十メートル北
ヤナシヨウの向かい

集会あんない

日曜日

朝礼拝 午前十時から十一時

夕礼拝 午後八時から九時

水曜日

祈り会 午後七時半

*初めての方も歓迎します。

*聖書を読む会を、八千穂・海尻・小海でしています。お問い合わせください。

*個人的相談にも乗ります。

しい皮膚病が現れた。彼はその後、生涯いやされることなく、隔離されて暮らし、そして死んだ。まさに、「人の心の高慢は破滅に先立ち、謙遜は榮譽に先立つ。」（箴言十八：一二）

聖書によれば、裁判所であれ、政府であれ、国会であれ、この世の権威は創造主なる神が立てたものである。ゆえに私たちはこれらを尊重しなければならない。しかし、この世俗の権威に託された仕事には限界がある。彼らに委ねられた仕事は基本的には治安の維持と不平等の抑制である。自己中心な人間の集まりである社会を維持するには警察と、徴税[＝]富の再分配が必要なのである。

けれども、この世の権威に許されていないことがある。それは宗教に癒着したり介入したりすることである。ウジヤ王は、聖なる領域への侵犯をして神に打たれた。しかし、歴史を振り返ると権力と宗教とはしばしば癒着し、多くの悲惨な結果をもたらしてきた。キリスト教も、イスラム教も、仏教も、そしてわが国近代における国家神道も権力と癒着することで、同じ過ちを繰

り返してきた。残念至極。

小泉首相が、この夏、靖国神社を日本国総理大臣の資格をもって参拝すると息巻いている。野党、諸外国、そして閣僚からも軍国日本のシンボルであった靖国神社は平和記念の場とするのはふさわしくないとか、宗教の異なる諸外国の国賓は靖国神社では表敬訪問もできないから、無宗教の戦没者国立墓地を造って戦没者を顕彰すべきだとか、いろいろ意見されている。しかし、首相は聞く耳を持たないようである。

筆者は、ウジヤの華々しい前半生と、悲惨な晩年を思いながら、首相とこの祖国の平和のために祈らないではいられない。

お米を感謝

先月号で山谷のおなかをすかせた人々のためにお米をご寄付くださいとお願いしましたら、通信が新聞に入った即日、何人かの方がお米を運んでくださいました。わざわざお米を買って持ってきてくださった方もいて、川上よしおばあちゃんは感激していました。神様の祝福がありますように。

なお米の運び先が川上村から南牧村海尻に変わりましたので、よろしく願います。連絡先は次のとおり。

井出二枝 電話 九六二二四 五

井出美樹 電話 九六二五三三四

* 藤田さんに連絡すればこちらから伺います。藤田寛 電話 四二七八六二 八八

* カンパしてくださる方は次の口座へ。

〒振替 二四 一四一五三七九六

山谷農場

△キリストのことば▽

ぶどうの木

「・・・わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。」

わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。だれでも、もしわたしにとどまっていなければ、枝のように投げ捨てられ手、枯れます。人々はそれを寄せ集めて火に投げ込むので、それは燃えてしまいません。」ヨハネ福音書十五章抜粋

聖書では神様と人との関係は、羊飼いと羊とか、父親と息子とか、主人としもべとかいろいろに表現されます。イエス様は、このとき、ご自分をぶどうの木に、私たち人間を枝にたとえました。

ぶどうの枝は幹に結びついていれば、そこから養分を吸収してやがてたわわに甘い実を結ぶことができます。枝だけでは、それがどんなに立派な枝ぶりでも、どんなに頑張ったところで実を結ぶことなどはできません。いずれ枯れて焼かれてしましましょう。

ぶどうの枝についても一つ興味深いことを聞いたことがあります。それは一番枝しか実をつけることがないということです。一番枝というのは、幹に直接つながっている枝のことです。幹から直接でている枝は花を咲かせて実をつけますが、そこから出ている小枝には実はつけないのです。

ぶどうの木についてこんなことを思い巡らしていると、神様と私たちの関係、イエス様と私たちの関係について、いろいろ考えさせられてしまいます。私たちはそれぞれにやつぱり実りある人生を送りたいと思つて、それなりに努力しているでしょう。けれども

実を結ぶ、充実した天国につながる人生というのは、単にまじめに頑張れば可能になることではないらしいのです。ぶどうの枝はどのつもの実を結ぶのですか。ぶどうの枝はしっかりと幹に結ばれているものだけが実を結ぶのです。私たちは枝で、イエス様がぶどうの幹です。私たちは枝である以上、どんなに頑張ったところで、枝だけで天国にいたる実を結べる道理はありませんね。イエス様にしっかりとつながることが必要です。

また幹に直接むすばれた一番枝だけが実を結ぶのでした。枝から派生した枝は実をつけることはありません。つまり、たとえばこの『通信』を読んで、ただキリスト教に関心をもっていますとか、興味がありますということ、ほんとうに人生に豊かな実をむすぶことができるわけではありません。親戚にクリスマスチャンがいても、実を結ぶわけではありません。あなた自身がイエス様を信じてしっかりとイエス様につながる時、あなたの人生には豊かな実りがあるのです。

自由にする愛

「だれに対しても、何の借りもあつてはいけません。ただし、互いに愛し合うことについては別です。」ローマ書十三八

おもしろいことを言う人がいた。「借金をするときは貸してもらつてありがたうという気持ちでいるのに、返す段になると、なんだかお金を取られるような気持ちになつてしまふのはどういふことでしょう」といふのである。まあ人間とは自分勝手な感情を持ちがちなものであるうか。つくづく罪人である。

ともかく、なんであれ人に借りができると、相手に対して卑屈になつたり、心の縛られるようなことを感じがちなものである。だから、聖書は借りを作つてはいけないうといふわけだ。十数年来の友情も金の貸し借りをしたばかりに破綻してしまつた

というような話を聞くこともある。借りる者、貸した者のあいだには複雑微妙な感情が働くのだろう。だから、御言葉は「なんの借りもあつてはなりません。」と勧める。

「ただし、互いに愛し合うことについては別です」といふ。物や金の貸し借りは人の心を縛つてしまい、えてして人間関係を複雑にしてしまいがちだが、愛の借りはむしろ人を自由にするからである。愛の借りとは「ああ自分はこんなにも愛されているんだなあ。」という経験をすることである。そのとき、人は閉じこもつていた小さな殻から飛び出す勇気を得る。そして、不思議なことに、ありのまま受け入れられたという喜びは、人を内側から突き動かして、自発的な愛の応答をうながすことになる。

もう二十年も前になるが、私は、今は沖縄で伝道をしているM先生の牧する青梅の教会に、一年生の神学生として日曜日に通ふことになつた。ところが、神学校入学まもなく、神戸に住む父が食道癌で余命半年の宣告を受け、入院生活が始まつた。そのためたびたび帰省をしなければならなくなつたので

ある。私は教会に仕えるしもべであるから個人的な都合はすべて捨てて、教会奉仕をすべきなのに、たびたび帰省をして十分な奉仕ができないことに悩んでいた。そして、M先生は、きっと私を厳しく見ていらつしやるのではないだろうかと内心びくびくしていたのである。

ところが、数ヶ月たつたとき、M先生はおつしやつた。「神学生にとつての最大の奉仕は、そこに礼拝者として存在することです。何ができる、何をしたということはいした問題ではない。神様は、君がそこに存在しているということ、君の存在そのものを喜んでくださるのです。」

その言葉から、先生が、なんの役にも立たない神学生である私の存在をも喜んでいただくのだということが伝わってきた。何が出来る出来ないで評価されるのではなく、そこに存在することを喜ばれるという経験をして、私のたましいは自由にされた。私はM先生に大きな大きな愛の借りを負つていた。その大きな借りゆえに、私は自由にしていたのである。